妙の光

通刊61号 **復刊40号**
2002年12月16日（季刊）
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜 〒953-0011
TEL 0256-77-2025

とべら

境内の三重塔近く、大きな松の木のすぐ下のせいか普段は地味であまり目立たない。十二月、落葉樹の葉が落ちて殺風景になった境内。椿に似た緑色の葉の上に、びっしりとついた薄い黄色の実が目を引いた。散策する人に名前を尋ねられたがわからない。

よく見ると黄色の実が三つに裂けて、中から粘り気のある真赤な種子が見える。植物図鑑を調べて〝とべら〟と判明。樹高二、三メートルとあるが、この木は四メートル近いので老木か。それにしても植えた木とも思えないので、鳥が種を運んできたものではないか。なるほど、赤い種子は冬場の鳥の恰好の餌だ。粘り気があればなおさら運ばれやすい。

さらに「節分にこの実を扉にはさみ、鬼をよけることがあるのでトビラの木」という図鑑の説明も楽しかった。身近にこんな話があることを知らなかった。

鐘と撞木（しゅもく）

小川英爾

年末の恒例と言えば除夜の鐘。妙光寺の鐘は昭和五十一年、戦争で取り上げられてから三十三年ぶりに復活して以降、毎年皆さんが撞きに来てくれる。本堂での除夜法要が済む午後十一時半過ぎから始めるが、そのころには鐘撞き堂に長い列ができている。自家用車で来る遠方の檀信徒、妙光寺裏の神社にお参りしてからという村の人たち。子供が中心の家族連れが多いのも微笑ましい。

大勢だから撞くのはひとり一回にしてもらっているが、それでも百八回では済まない。撞いた順番がわかるように数を書いた記念品の用意があるが、百八番目以降はすべて百八にしてある。たいがいは雪もない静かな冬の夜の裏山、そこに鐘の音が響いていくさまは、新しい年を迎えるにふさわしい光景だといつも感じ入っている。

鐘の音を聞いていて面白いのは、ひとりひとり皆その音が違うこと。男性が力任せに撞いても決していい音は出ない。小さな子供の力でも、タイミングが合えばきれいな音がする。鐘の音は力の加減と同時にもうひとつ、撞木（しゅもく）というあの棒が音を決める。決して金属ではない。一般的には柔らかいシュロの木がいいといわれるが、妙光寺は堅い桜の木だ。鐘の大きさによって木の材質と、それに太さと重さが見合っていることが大事なのだ。昔から「鐘が鳴るか撞木が鳴るか」と言われて、撞木が

音を左右する。そこに撞く人の力加減が加味されて、あの響きが生まれる。

それは人と人の関係でもいえそうだ。人に教えを乞うとき、求める側の予備知識や熱意で教える側の内容も違ってくる。〝清水の舞台〟で有名な京都の清水寺。ここに大西良慶和上という、以前に五つ子の名付け親として知られた高名な住職がおられた。大変な長命で昭和五十八年に百九歳で亡くなられている。あるとき雑誌の記者が取材に訪れ「〇〇のことでお話をお聞きしたい」と告げると、当時九十歳の良慶和上は「わしは鐘であんたは撞木じゃ。あんたが箸でたたきゃ、わしは箸の音しかせんわいの。あんたが大きな棒でわしを打つなら、わしはそれだけ大きな音が出るわいの」と応えられたと冊子にあった。

その同じ記者が、戦争当時の軍需工場での体験を紹介している。その工場には大人に混じって犯罪を犯した少年たちが働いていて、月二回の面会日があった。ある日A少年に面会に来た父親は、社会的に重要な地位にあった。その父親はわが子の顔を見るなり、いきなり大声で「わしはお前を信じていたのに…。わしの顔に泥を塗った」と怒りにふるえながら叱りつけたという。そのとき少年は、一言も発せずに父親をにらみつけていたそうだ。

次の面会日にこんどは母親が訪ねて来た。少年の姿を一目見ただけで母親はおろおろして「ごめんね、ごめんね、お母さんがいたらなかったの。あんたが悪いんじゃないの。ごめんね、ごめんね」と、くり返しくり返し我が子に詫びながら泣き出した。するとさきほどまで固い表情をしていた少年の顔は、母の泣き声でとたんに涙でくしゃくしゃになって、そして母親にだきついた。傍らにいた大人たちも思わず泣いてしまったという。

少年の心という鐘を撞いた撞木は、父親と母親では違っていた。少年の心の鐘を響かせたのは少年の心と共鳴したいという思いと、少年の持つ人間としての可能性、心の尊さに気づいて欲しいという母親としての愛情という撞木だった。

以前に冒頭の妙光寺の除夜の鐘風景を、もう少し詳しくそれに情感を込めて連載中の新聞に書いたことがある。妙光寺の鐘を作った滋賀県の『金寿堂』という会社の人が、和歌山県のお寺から鐘を作りたいとの相談があって、説明するのにこの新聞コピーを持っていったそうだ。というのも最近はほぼ全国のお寺に鐘が納まったことと、不況のせいで鐘を作る会社も注文が少なくて大変だそうで、そこでも別の何社かとの競争になった。しかしどこの会社を選んだところで、できる鐘も金額にも大きな差はなく、その寺の檀家役員の方も困っていた。

そこで『金寿堂』の担当者は、そのお寺の役員会の席でこの新聞記事を配り「ウチが納めさせてもろうたお寺さんです」とだけ説明した。皆が黙ってしばらくそれを読んで後、役員のひとりが「この会社にしようやないか」とポツリ言って、全員が納得してすんなり決まってしまったという。「鐘に大差はないぶんこちらの思い入れが大事なんですね。相手が共鳴するように、鐘撞きと同じです。妙光寺さんのおかげです」と、とても感謝された。

妙光寺で除夜の鐘を撞いている皆さんの気持ちが、そのまま和歌山県のお寺の人たちに伝わったと言うのは大げさだろうか。ひるがえって、自分の思いという撞木が仏様の教えという鐘に合っているかどうか、反省することしきりである。（文中で冊子とあるのは仏教伝導協会発行「新みちしるべ」です）

信心

長寿一番

巻町　河野テツ（九十八才）さん

明治三十七年一月一日生まれだから年が明けると満九十九歳。お元気で、足が弱ったのと若干耳が遠いくらい。仏壇で読経してからお話を伺うと「今日は私の最初の子供の祥月命日で、お経をあげていただいてとってもよかった。生まれて九十日で死んだんですよ。妙厚嬰女といいます」と、記憶も確か。

「実家の兄は長生きでこのあいだ百歳と五カ月で死んだけど、すぐ上の姉は早かったね、八十四だった。」そのお兄さんが九十歳のころ、ラジオの株情報を聞きながら家業の豆腐屋を手伝って油揚げをあげていると、お兄さんご本人から法事の席で聞いたことがある。

一男四女の兄姉のうち実家の菩提寺が法華宗で、東京に嫁いだ姉以外の三人は皆妙光寺の檀家に嫁いだ。「昔は同じ宗派の家に嫁に行くようにしたからね。だから私もず―とお題目です。」

「お寺参りもよくした。帰りにお寺の近くの山で春はワラビ、秋はきのこ採りするのも楽しみだったし。ただ私が乗物に酔う体質で、お盆の暑い時期はバスに乗れなくて行けなかった。だから春秋のお彼岸と、お会式は欠かさなかった。

酔うと言えば嫁に来て初めてのお寺参り、一見（いちげん）参りというあれ、二十歳だったね。角田まで人力車に載せられて、昔あったあの峠まで来たら酔ってどうにもならなかった。仕方なく紋付着てあそこから歩いたの、忘れません。」八十年前の話である。

「身延山は三回お参りして、二回は七面山に登った。三回目がホラ、御前様あなたの住職認証式に一緒に行ったときですよ。」二十八年前のことだ。

「今は寒いので、毎朝失礼して蒲団の中からお仏壇参りしてます。それでね、目を瞑って思い出しながら妙光寺、実家のお寺の本久寺、そうして亡くなったお爺さんの墓、先祖の墓、実家の親の墓、兄姉妹それぞれの墓、友達の墓、お参りするんです。全部で十一カ所ですよ。毎朝一時間半かかります。」楽しそうに語ってくれた。

子供五人、孫十一人、曽孫九人。河熊呉服店の名で親しまれるお宅で、長男夫妻、孫夫妻、曽孫二人に囲まれた幸せな毎日を過ごす。

寺の動き

行事盛りだくさんの秋

久遠寺本堂前で

・身延山団体参拝の旅

九月二十九日から三泊四日で、山梨県にある総本山身延山久遠寺への団体参拝旅行を行ないました。参加者は檀信徒、安穏会員、それぞれの友人等で総勢二十七名。いつもより少ないぶん、大型バスにゆったりでした。

新潟を朝出て甲府で昼食、二時に久遠寺到着。参拝の後、係の案内でゆっくりと広い堂内を隅々まで拝観、夕方には宿坊に入りました。

翌朝は五時起床、まだ暗い道を久遠寺に登って五時半からの朝のお勤めに参列し、荘厳で清新な空気に感動。宿坊で朝食後七面山登詣組と、周辺寺院参拝組に別れて出発。

七面山敬慎院の大やかんで

台風接近で止むことのない雨の中を、住職以下十六名は山上の敬慎院めざしてひたすら登る。早い人で四時間弱、遅い人で六時間程で到着。入浴、早い夕食後に本堂での法要に参列。時期的なこともあって、広い建物もほぼ貸しきり状態。心ゆくまでお参りすることができまし

た。台風がますます近づき、翌朝楽しみの富士山からのご来光は拝めず、下山して夜の温泉ホテルまで、雨の止むことはありませんでした。

寺院参拝組は久遠寺奥の院、青柳昌福寺参拝。ここでいただいたお昼の味噌汁が最高で、三杯飲んだ人もいたとか。午後は富士五湖巡りと、猿回し劇場を堪能して十谷温泉泊。最後の夜は二組合流して長野の温泉で賑やかに盛り上がりました。

台風一過の四日目、松本市浅間温泉の臨済宗神宮寺へ。高橋ご住職はいま日本で一番活躍する僧侶で「楽しみにして待っていました」と、その活動の数々を熱心に語っていただきました。あまりのすばらしさに「もっといたかった」「涙が出てきた」と、出発してからの車内の声でした。妙光寺住職と親しく、昨年夏のフェスティバル等々、何度か来ていただいている間柄です。

その後松本城、わさび園と観光して、夕刻無事の帰着でした。

●授戒会に二十二人の申し込み

十一月十七日、日蓮聖人七二一回忌の御会式法要に併せて、第一回の授戒会を行ないました。今年は寒くて雨の多い十一月でしたが、この日ばかりは最高の小春日和。

遠方の方を除いた十四人が朝九時に集合、一時間半に渡って住職の話を聞いて研修です。その後、御会式参加の人たちも混じった五十人で法要。仏前で授戒のひとりひとりに戒名、記念の数珠、名前入りの略袈裟が授与されました。

昼食をはさんで鎌倉市円久寺の松脇住職が、皆さんに〝やさしいお経の話〟と題してお説教。「わかりやすくてとって

車座で研修

法要風景

もよかった」と、後で多くの方からの声が届きました。

授戒会は来年以降も継続して行ないます。ぜひ参加をお考えください。

（11ページにこの日授戒を受けられた方の感想を一部紹介しました）

●『四菩薩像』製作の進行状況

本堂のご本尊として現在安置しているお釈迦様ですが、その脇侍仏となる菩薩像四体の製作が進んでいます。滋賀県甲南町にある石川仏師の工房を、十一月に住職が訪ねました。

総高さで百五十センチ程になる檜の像で、台座が四体分と菩薩像一体がほぼできていました。残り三体を来年九月までに完成させて、十月に開眼法要をする予定です。「十分間に合いますが、決して気が抜けない。そんな厳しい中で作業を進めています」とは石川仏師の言葉でした。五体が揃ってさらに荘厳さが際立ちます。楽しみにしてください。

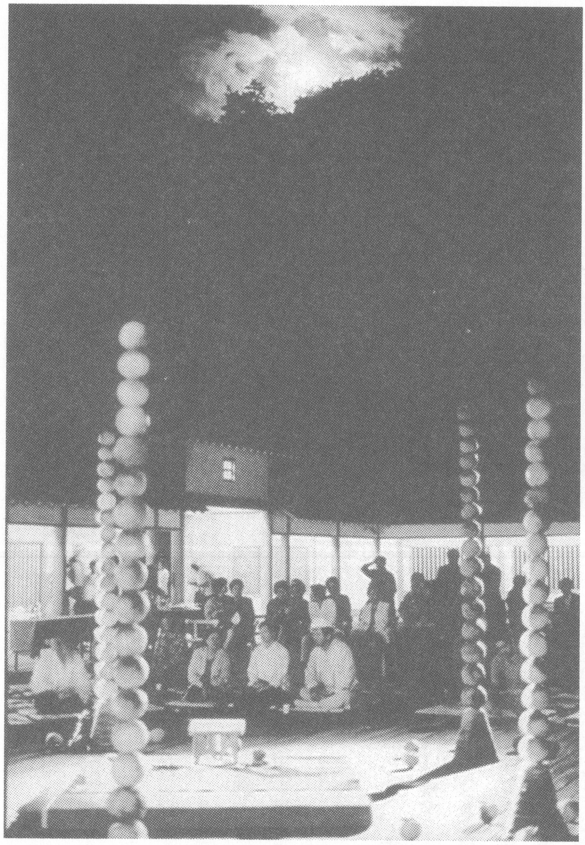
●陶芸展が大盛況

九月十三日から十日間、滋賀県に住む陶芸家の中野亘さんが妙光寺で作品展を開催し、連日大勢の人で賑わいました。期間中に雨天の日が二、三日あったのですが、人の足がと絶えることはなく驚くほどでした。中野さんが新潟市出身で固定したファンも多く、その人気のせいです。

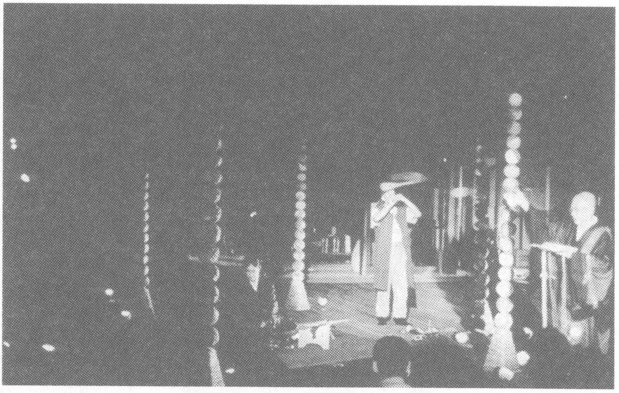
陶展の風景（写真３枚は「ポート・イマジン」撮影）

一方「以前から新聞等でお名前を見聞きして妙光寺さんは気なっていました。でもお寺は誰でもが入れる所ではないでしょ。陶芸展なら気軽に入れると思って来てみました」という声がとても多かったのです。妙光寺はいつもオープンなのですが。期間中、別の友達を誘っては何度も来た方がかなりおられました。

十八日夜の声明（しょうみょう）と平家琵琶、そして中野さんの土笛のコンサートには百五十人ほどが集まりました。冷え込んで厳しい環境でしたが、月の浮かんだ空に、幽玄で見事なまでの音の世界が広がりました。



裏山にかかる月と院庭



声明と平家琵琶と土笛

この陶芸展を通じてまたさまざまな人の輪が広がっています。

（新潟日報誌上で紹介された記事を、今回同封しました。）

●菊花の展示

毎年秋の恒例になりましたが、巻町の内藤清さんが丹精込めた菊花を展示してくださいました。ことしは盆栽仕立てで三鉢です。皆さん足を止めて、感心していかれます。

●猿が出没しています

墓地や境内に猿が一頭出没しています。日本猿と思われるれる大きさですが、人の姿を見ると逃げるので危害を加えることはないと思われます。でも冬場で餌がなくなるので、特に子供や女性は気をつけてください。目を合わせないことだと、聞いた覚えがあります。

もともとこの土地には生息していないので、ペットが逃げたか逃がしたかでしょう。経験のない野外での冬を越せないと思うと可哀想です。

●葬儀プラン提示

突然にやってくる葬儀ですが、近年そのあり方を考え直したいという声が多数聞かれます。そこで皆さんが少しでも納得のいく葬儀を行なうためにと、妙光寺では検討してきました。

このたびそのひとつの案として、今回別紙で提案しました。現状では葬儀社の協力が必要です。そこで巻町、西川町、東京都内の三社の賛同を得て基本な見積り書をいただてあります。参考にしていただき、詳細はご相談ください。もちろん個々の葬儀について妙光寺が一切の指示をするものではありません。誤解のありませんように。

授戒会参加者の感想

このたびは、身にあまる立派な豫修法号を頂戴し慶びに堪えません。何か生まれかわったように感じまして、これからの人生に対して勇気と希望を授けていただきました。この法号の意味するところを指針として永く精進して参りたいと存じますので、一層の御指導をお願い申し上げます。

なお、今回の授戒会に参加させていただき、つくづく良かったと思いました。

Sさん　男性　76才

さほど信心のない私が授戒会に参加させて頂きました理由は、単なる好奇心からで、外に特別な理由などありませんでした。

授戒会の当日は、生前戒名に関わるお話を、又、人生に関わる御法話など、時間をかけて拝聴し、お題目を一心に唱え、そして寺の心ずくしのお斎を頂きました。心にのこる一日の行事を終えてのち久々に晴れ上がった空を仰ぎながら境内を後にしました。

私の好奇心はこの体験により心の奥に新たに芽生えるものを確信しながら精進して参りたいと思います。

Nさん　男性　71才

17日の日は大変に有意義な日でした。形から入るのも大切だと感じました。荘厳な式に感激し心引き締まる思いがしました。

あの世への準備が少し出来たようでうれしいです。

もう少し檀家としての心がまえの講義の時間が欲しいです。

今後もこのような研修の機会があったら良いと思います。

厚く御礼を申し上げます。

Wさん　男性　66才

「生前に戒名を戴けたらいいなー」という気軽な気持ちで申し込みさせていただきました。

しかし、当日出席させていただき、気持ちを改めました。まず授戒式の前に、ご住職より戒名を戴くことの意味を教えていただきました。そして授戒式では、その本格的で荘厳な雰囲気にただただ感激いたしました。

戒名の意味を記した文面や、袈裟、数珠等の有難い品々を戴き感謝の気持ちで一杯です。

今後は、素晴らしい戒名に恥じないような実生活を目指して、少しでも仏様の教えに近づけるよう精進していきたいと思います。

本当に有難うございました。

Aさん　女性　82才

私は同伴者として出席させていただき、ご住職様の原点に帰った意図に感激いたしました。しかもこの金額！（社会通念からいくと確実に一桁少ない！）。この先駆的な試みに感銘致しました。これからも何卒宜しくお願い致します。

Aさんの長男　48才

安穏葬の実例

以前から、もしものときの葬儀について、相談が多数寄せられています。そこで妙光寺からの遠近にかかわらず、納得の行く内容と経費での葬儀を、地元の協力葬儀社二社と協議を進めてきて原案ができました。

そこへ新潟市内と東京都内の方からの申し出があり、了解のうえで実施しました。いずれも事前に相談があって、進め方を決めておいたので極めてスムーズでした。関係者の同意のもと、概略をご報告します。

Aさん　（84歳・男性・新潟市）

事前に家族が妙光寺と協議。本人の意志で簡素に、できれば本堂使用を希望される。数日後の朝、妙光寺への連絡で葬儀社が病院に出向いてご遺体を自宅に搬送。自宅で枕経の後、日程と費用見積りを協議。通常は三日目になる葬儀が、行事と重なり本堂の使用ができない。四日目とするが、それなら先にご遺体の火葬を故人の婦人が希望。（これは遺骨葬といって、新潟県北部から東北地方にかけて、一般に行なわれています。北蒲原郡生まれだった婦人から違和感なく言い出されたものです）

二日目昼、出棺経の後、近親者のみで火葬場へ。霊柩車でなく、遺体搬送車を使用した。

三日目午後六時半から、自宅で簡素な祭壇に遺骨を安置して通夜。住職、親族、聞きつけた退職前の一部の会社関係者、近所の方々も。広い部屋ではないが、場所を取る棺がないから全員納まる。葬儀社の司会もなく、形式的でない手作りの印象がある。

四日目、九時半マイクロバスで自宅出発。午前十一時から妙光寺本堂に生花を飾り、ご遺骨を安置しての葬儀。十二時お斎。三時終了。この日は葬儀社が司会と進行を担当。

葬儀社支払い経費一式（含バス代）二十六万七千円。
（お布施、飲食、引出物代金は別途）

Aさん婦人の話

故人が一番望んだ安穏廟です。葬儀も「○×セレモニーなんて斎場はいやだから妙光寺でお願いしてくれ…」と、箇条書きで遺書になっていました。ご近所の方等から「遠いし、なぜ先にお骨にしたのか」と聞かれました。遺志ということと、それにお通夜の席上ご住職が説明くださったので、皆さん逆に感銘しておられました。家族皆喜んでいます。ただ後日新聞に死亡広告を出したので、後から

弔問の方が続いて疲れ気味です。

Bさん　（77歳・男性・東京）

単身居住のため、新潟県内居住の妹夫婦が事前に妙光寺と相談。都内の協力葬儀社に一切を依頼、二十三万円の見積り。

三週間後の早朝、病院から妹と葬儀社に連絡が入る（前夜に危篤の報）。葬儀社がご遺体を引き取り、民営火葬場の霊安室に安置。翌日の火葬を希望したが、友引で火葬場が休みのため翌々日に。

三日目午後一時半、親族参集し妙光寺から出向の僧侶が読経、引きつづいて火葬。終了後近くの料理店でお斎。妹の夫が新潟の自宅へご遺骨を運んで安置。関係者の日程を調整して、二週間後に妙光寺本堂で葬儀。

葬儀社支払い経費一式　三十一万円
（お布施、飲食、引出物代金は別途）

早朝割増し、二日間の霊安室安置のための保管料、火葬場休憩室使用料、ドライアイス代、見積り以外の係員への心付け、これらで見積り金額より増額になった。

妹夫婦の話

幼い頃から仲の良かった兄なので、妙光寺さんの本堂で葬儀がやれてとてもうれしい。それにBの奥さんのときはなんだかんだで四百万円近くかかったので、本当に助かりました。よくしてもらったので、葬儀社さんのやっておられる団体に少し寄付しようと思ってます。

一般的な葬儀の流れと、費用概算を今回別刷りでお知らせしました。詳細は直接ご相談ください。妙光寺がお手伝いできることは、葬儀と遺骨を運ぶことです。もっと詳しく知りたい、また事前に経費を預けたいという方は直接ご相談ください。

葬儀の執行、本堂の使用は檀信徒になることが条件です。無宗教でお別れ会にしたいという方には、葬儀社の紹介のみします。また一人暮らし等で葬儀前後の手続き処理も依頼したいという方があります。これは法律上の問題が多いので相談にはのりますが、実施は弁護士、他の団体をお世話します。

寺庭から

ポチ子に感謝

小川　なぎさ

末の双子の娘たちが生まれた一ケ月後の、雪がちらつく寒い日。捨てられたのか、お勝手の玄関で鳴いていた小さくて真っ白な子犬を拾いました。私たちはポチ子と名付け、以来十六年、境内を走ったり、玄関先につないでいたりしたのでご存じの方も多いと思います。

二年余り前から寝たきりになり、部屋のなかで余生を送っていたのですが、先日寿命が尽きて眠るように静かに逝ってしまいました。

この犬とは、子育てや義母の介護など、私の一番多忙で余裕のない時期を共にしました。なでたり抱きしめたり、散歩に行ったり、その暖かさに慰められ癒されてきました。ですから、犬に恩を感じるという言い方はおかしいかも知れませんが、本当に大切な犬でした。

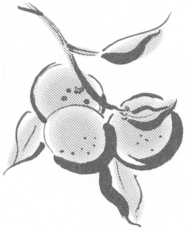
十四年前、「妙の光」の復刊一号に初めて「寺庭から」を書いたとき、私は当時妙光寺で飼っていたたくさんの動物たちのことを書きました。

家族の世話でも大変なのに、あのころはもっとたくさんの動物を飼いたいと思っていたのは、私が若くて元気があったからでした。この間にも「豚を飼いませんか?」という笑えるお話や、娘たちの学校に紛れ込んだ野良犬をひきとり、小屋まで用意してやったのに二ケ月で逃げられたことなどを思い出しました。

残るはさすがに長寿なヤギと、池の鯉だけになりました。もう動物を飼うのはやめよう、ヤギを最後のペットにしようと思っています。私も中年になり、体力も気力も衰えてきましたから。

さて、今年もあと少しで終わろうとしています。経済も回復はしなかったし、心配なことの多い世の中ですが、あきらめないで進んで行きましょう。

私は何かを経験するたびに自分自身が、とても強く、たくましくなるように思えます。犬の介護も楽ではなかったけれど、得るものがたくさんありました。来年も与えられたことから逃げないでやって行きます!



ちょっと長目のあとがき

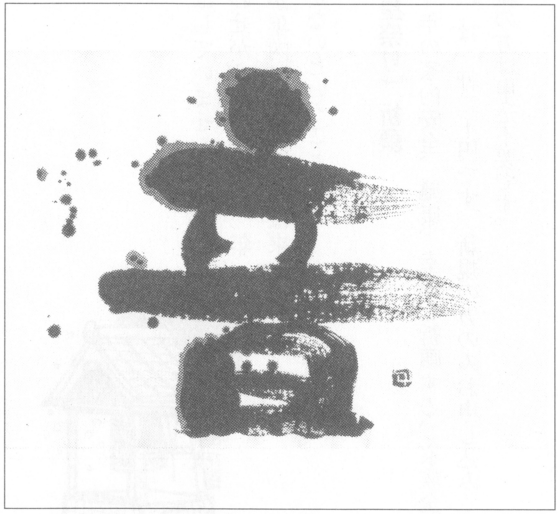
小川英爾

秋に陶芸展をした中野亘さんの友人で、乾（いぬい）千恵さんという岐阜に住む書家がおられます。その方のお母さんが、ちょうど四十年前に妙光寺に宿泊されたことが、今回の陶芸展をきっかけに偶然わかりました。当時おもに青少年の旅の宿として提供していた、ユースホステルの客として。

それも正月で先代住職夫婦にとてもよくしてもらい、心から離れない思い出だそうで、大切にしてきたという妙光寺からのはがき、海岸で撮った写真、そのコピーが先頃送られてきたのです。

はがきには私の父の字で「雪が多いと駅から歩きになるので、十分な支度をしてくること。三が日は寺では雑煮を食べるから、自炊しないで一緒に食べたらどうか」等々細々と書いてありました。そして、白黒写真で四十年前の乾さんのお母さんと一緒に写っている少年は、なんと十歳の私でした。記憶はないのですが。

その乾さんの書と谷川俊太郎さんの詩、そして写真を組み合わせたすてきな子供向け絵本が一月一日号で出るそうで、早速送っていただきました。その絵本に折り込まれた冊子に、これまた偶然今回同封した新聞記事を書かれた大倉宏さんの文があったのです。



乾千恵さんの書『こどものとも』から

添えられた手紙には「思い出の妙光寺…。いつもいつもこころの中にあります。ご縁の巡りはほんとうにふしぎ…です。母　文子」とありました。つくづく人の繋がりに驚いた一年です。

（その絵本は『こどものとも』562号　福音館書店　410円です）

行事案内

お札配り

十二月に入り、来年のお札を持って県内檀信徒のお宅に住職と鎌田が手分けして伺っています。日時の連絡は難しいので、電話いただければご都合に合わせます。

大晦日、除夜の鐘

大晦日夜十時半から除夜法要。引き続き十一時四十分から除夜の鐘を撞きます。どなたでも先着順に撞いていただき、縁起物が当たる抽選もあります。「お焚きあげ」もありますので、古いお札、仏具等をお持ちください。

元旦、年始参り

元旦と二日の朝九時から午後四時まで、ご年始の受付です。新年は妙光寺本堂の初参りから始めましょう。

年回忌のお知らせ

平成十五年度に年回忌のあるお宅へのお知らせは、暮れのお札配りの際お渡しするか、郵送します。以前のような、堂内での掲示はしていません。たまに問い合わせがありますが、〝年忌札〟が年内に届かないのは来年法事がないということです。

『星祭り』祈願

来年一年の家内安全、健康、幸運を祈願する、家族全員の『星祭り』は一軒二千円です。新規の方のみお申し込みください。継続の方は申込不要です。

位牌檀の使用

本堂脇の位牌檀にお宅ごとの位牌を安置して、月命日の朝ご回向（えこう）しています。費用は一年一万二千円。妙光寺でいう永代供養料は、この三十年間分（三十万円）です。年間供養料は毎週取り替える本堂、祖師堂、位牌檀のお花代に充当しています。お位牌安置の方は、平成十五年度の供養料を三月迄にお願いします。